

もう、隠岐に横地次郎の家は

ない。亡くなった次郎の未亡人が売っぱらってしまった。隠岐には行ったこともない未亡人である。愛着があるわけがない。

愛着のない家や土地は売ること
にためらいがいらぬ。親戚や兄弟は怒るが、理屈はどつちにもある。あつちの理屈があれば、こつちにも理屈がある。どつちもどつちの理屈である。名義を得た人が強い。

ただ、家や土地は売ったならそ

れまでである。亭主をくくした

嫁が嫁ぎ先の家や土地で揉め

て、売る話はテレビドラマでも

よくある。テレビドラマには殺

人が加わる。揉めない兄弟や親

戚はいない。いま隠岐の岡部家

の墓はわたしが管理している。

正確には、隠岐の島の墓を管理

する会社に委託している。盆と

暮れに墓掃除をした写真が送っ

てくる。その写真を仏壇に供え

て父母や先祖代々の位牌に報告

をする。それで口を慰めている。

わたしの家の2階のベランダ

には鉢の隠岐しゃくなげがあ

る。小さな鉢のしゃくなげを隠

岐から持ち帰ったが、それがい

まはぐんぐんと枝葉を伸ばして

ベランダを占領している。洗濯

物を干す家内も隠岐しゃくなげ

には迷惑そうである。しかし、

このしゃくなげが春を過ぎて、

5、6月になる季節には見事な

赤紫の花を咲かせる。その季節

た。やはり、家を守るといふの

ある。隠岐の島は互いの家を屋

号で呼び合う。人が住まなくな

った家は痛みが早い。岡部の家

もあちらこちらと壊れているら

しい。「屋根瓦も全部取り換え

てごさんかい」と電話があった

が、値段を聞いて取りやめにし

た。やはり、家を守るといふの

のかと推測する。

今年の正月、次男坊の源紀が

「東京の下北沢に家を建てる」

と事もなげに言った。「おまえ、

本気なのか」と言ったら「嘘を

言つてどうするのさ」と笑つて

いた。「一億田はするんじゃないのか」と言つと「さあ、どう

かな」とはぐらかした。表札は

わたしが書くことになった。知

覧の知人の建築屋射手園さんに

電話して表札になる板を頼ん

崩れかけの旧家屋

にわが家を訪れる人は「ほう」と

感嘆してくれる。わが意を得た

りど、それから隠岐談話になる。

隠岐の岡部の家はいまもなん

とか持ちこたえている。親父や、

は大変なことなのである。わた

しは隠岐の岡部の家に住んだこ

とはない。従つて、さほどの愛

着はないが、息子はもつとない

はずである。親父が家に手を付

けられなかった理由がよくわか

る。旅先で、崩れかかっている

旧家を目にする、揉めている

「鍵屋のおつあん」が面倒を

る。旅先で、崩れかかっている

旧家を目にする、揉めている

(松浦市出身)